

伊藤俊一，鶴見隆正(責任編集)

「理学療法 MOOK 14 腰痛の理学療法」

木村貞治

(信州大学医学部保健学科理学療法学専攻)

わが国の理学療法の歴史は，まだ 40 年を少し過ぎたところであり，これまでの治療体系の多くは，病態生理学的な知見や経験則を基盤として構築されてきた傾向にあると言える。

しかし，1990 年代からの「根拠に基づく医療(Evidence-based Medicine, EBM)」の潮流により，従来の経験則基盤型の臨床判断だけではなく，質の高い臨床研究の検証結果であるエビデンス，臨床家の臨床能力，そして，患者の価値観や意向を考慮した患者中心型で科学的な臨床判断にパラダイムシフトすることの重要性が提言されてきた。

このような EBM の潮流を受けて，わが国の理学療法分野においても，「根拠に基づく理学療法(Evidence-based Physical Therapy, EBPT)」の実践を目指して，様々な啓発活動が展開されてきている。

しかし，実際には，本書のテーマである「腰痛」のようにわが国の理学療法士が担当する頻度が高い疾患においてさえも，臨床判断の材料となるエビデンスが十分ではないとともに，理学療法の臨床判断を EBPT の概念・手法に則って展開する臨床体制はまだ十分には整備されていないのが現状であろう。

このような状況の中で，腰痛に対する EBPT を実践

するための具体的な羅針盤として，本書が果たす役割は大変大きいと考える。

本書は，腰痛の病態，診断と治療に関する新しい概念について包括的に整理した上で，急性腰痛や慢性腰痛の病態，評価法，物理療法，徒手療法，運動療法の実際が具体的なイラストや写真に基づいて大変分かりやすく，そして，系統的に示されているとともに，症例報告に基づいた実践的な内容も紹介されている。また，それらの評価や治療の根拠として，ランダム化比較試験(Randomized Controlled Trials, RCT)，メタ分析，システマティックレビュー，ガイドラインの情報が丁寧に紹介されている。そして，腰痛に対する理学療法の有効性についての臨床疫学的なエビデンスが決して十分ではない現状を鑑みて，腰痛に対する理学療法の現状と今後の展望について整理されている。付録にある「新しい腰痛評価」も，腰痛に対する理学療法のエビデンスをつくるための評価フォーマットとして活用できるものとする。

今後，本書の内容が，腰痛に苦しむ方々に対する効果的な理学療法を実践するための科学的な臨床判断の指標となるとともに，腰痛に対する理学療法の効果に関する質の高い臨床研究を展開するための指針となることが期待される。

●B5 判 280 頁

定価 4,410 円(本体 4,200 円+税 5%)

2008 年 三輪書店・刊